

須佐神社から龍頭が滝までを歩いてみた(その2:尾崎坂の今昔物語)

この3月に、須佐神社から菅原集会所まで歩いた時は、旧県道「湖陵掛合線」を通りました。佐田町三代地内にある三坂の峠までは、佐田町宮内地内から約5kmの坂道を登ります。この坂道は、「尾崎坂」と呼ばれていますが、この呼称は、江戸時代には、すでに使われていたと思われます。そんな由緒のある坂道ですが、歩きながら、この旧県道が建設されるまでは、人々はどのようなコースを通っていたのだろうか、という疑問が湧いてきました。

そこで、大日本帝国陸地測量部が、明治32年に測図したという、5万分の1の地図を参考にして、国土地理院の地図の上に、明治以前のコースを再現してみました。下記の地図で、赤く着色した道路が、明治以前の「尾崎坂」です。旧道と比較してみると、重なりあう部分もありますが、狭い谷を選ぶように進み、現在の「尾崎坂」よりも、ずいぶん下のほうを登って行く部分もあります。

しかし、旧道のコースと大きく違うのは、緑色で着色した道路との接続地点から、東側の部分です。この接続地点は、現在では、佐田町三代地内において、旧県道から林道寸貝線が分かれるところだと思われます。明治以前の「尾崎坂」は、この接続地点から、林道寸貝線を進み、力石谷(ちからいしだに)を通過。さらに村境の峠を越えて、掛合町松笠の、面田(おもだ:小字名です。)と呼ばれる場所に、到着しました。菅原集会所の、少し北側に出てきたようです。

一方、この緑色に着色した道路は、三坂の峠を通過し、現在の菅原集会所に至るコースを取っていますから、旧県道と重なりあっています。ちなみに、「松笠1番地」は、赤色の丸で示した、「面田」地点です。番地が振られるのは、明治6年頃から同20年頃までの間ですが、この時代に、この地点は、松笠の玄関口として考えられていたのでしょう。

先ほどの明治32年の地図によれば、赤色の道路、すなわち「尾崎坂」は、「聯路」(れんろ)と呼ばれる、隣接する村の主要な居住地を結ぶ、幹線道路として取り扱われていたようです。一方、緑色で着色した道路は、「小径」(しょうけい)と呼ばれる、支線道路だったようです。

この地図は、その後、何度か修正されます。昭和7年修正版では、力石以東の赤色の道路は点線となり、反対に、緑色の道路は2本の実線によって、県道として表示されています。

道路の変遷、盛衰の原因を考えてみるのも、面白そうですね。

